

5 畜 産

項 目	作 業 内 容									
<p>(1) 飼料用イネ、飼料用米の収穫・調製</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○飼料用イネ、飼料用米の収穫・調製 ○秋播き飼料作物の播種 ○稲わらの収集 <p>ア 飼料用イネ（稲発酵粗飼料（WCS）用イネ）</p> <p>WCS 用イネは、栄養価や収量を考慮すると糊熟期～黄熟期が収穫適期とされる。従来品種の黄熟期の目安には、出穂後の日数（表1）のほかに①穎の半数が黄化する、②葉緑素が消失して穀粒が黄色となり、爪で容易に破碎できる、③胚乳がロウ状になる、等がある。</p> <p>黄熟期の水分は、サイレージ調製に適した65%以下のものが多い。降雨直後の収穫は水分が高く、サイレージの発酵品質が低下するので避ける。また、牛の嗜好性や消化率が高い極短穂茎葉型品種（表2）は、刈取りステージが進んでも消化率が低下しないため、早刈りをせずに、糖含量が十分に高まる出穂後40～70日以降に収穫するのが適当である。</p> <p>表1 WCS 用イネの黄熟期の目安（出穂後日数）</p> <table border="1" data-bbox="485 1234 1380 1337"> <thead> <tr> <th></th> <th>早生品種</th> <th>中生・晩生品種</th> <th>モミロマン</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <th>出穂後日数</th> <td>25～30日</td> <td>30～40日</td> <td>40～50日</td> </tr> </tbody> </table> <p>表2 極短穂茎葉型品種</p> <table border="1" data-bbox="480 1435 1374 1516"> <tr> <td>つきはやか（早生）、たちあやか（中生）、つきあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）</td> </tr> </table> <p>イネを刈り落とした後にはほ場で予乾する場合、2～4日間程度の晴天を見込んでから収穫する。土砂の混入や籾の脱粒による品質・栄養価の低下を防ぐため、過度の反転は控える。イネは茎が堅く、中空構造で嫌氣的条件を作るのが難しく、付着する乳酸菌も少ないため、サイレージ調製では乳酸菌製剤等の添加が望ましい。ロールベールサイレージにする際は、フィルムの巻き数は6層を基本とし、収穫翌年の夏を超えて利用するようであれば8層巻とする。</p> <p>長期間の保管では、防鳥ネットやテグス等を利用した鳥害対策を講じる（写真1）。ネット等はロールベールに密着しないよ</p>		早生品種	中生・晩生品種	モミロマン	出穂後日数	25～30日	30～40日	40～50日	つきはやか（早生）、たちあやか（中生）、つきあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）
	早生品種	中生・晩生品種	モミロマン							
出穂後日数	25～30日	30～40日	40～50日							
つきはやか（早生）、たちあやか（中生）、つきあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）										

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 秋播き飼料作物の播種</p> <p>(3) 稲わらの収集</p>	<p>うにするとともに、保管場所周辺環境整備（草刈り等）を定期的実施する。獣害が心配される地域では電気柵の設置を検討する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
	<p>写真1 ネットによる鳥害対策</p> <p>写真2 立毛乾燥</p> <p>イ 飼料用米</p> <p>多収品種では、低速走行や刈取り条数を減らす等の対策によりコンバインへの負荷を低減する。</p> <p>乾燥経費を下げるため、倒伏や脱粒、気象条件に問題がない範囲で立毛乾燥するのも有効である（写真2）。立毛乾燥で籾水分18%以下にするには、早生・中生品種で出穂後50日、晩生・極晩生品種で60日が目安とされる（地域や気象条件により増減する）。貯蔵時のカビ・腐敗防止のため、最終的に乾燥機で15%以下に仕上げることが重要である。</p> <p>本県のイタリアンライグラスの播種適期は10月上旬～11月上旬で、10a当たり3～4kg播種するのが基準である。不耕起栽培や播種時期が遅れる場合、播種量はやや多めの4～5kgとする。播種後は、種子と土壌の密着度合を高め、発芽を早めるため2～3cm程度の覆土・鎮圧を行う。鎮圧は発芽を早く揃えるだけでなく、表層の凸凹をなくし、収穫時の“土の混入”を防ぐとともに、冬季の土壌乾燥を軽減する効果もある。</p> <p>稲わらの収集は、天候やほ場条件によるが、できるだけ晴天が3日以上続く日に行う。コンバインからバラ落としされた稲わらをロールベアラで収集するときは、テッド・レーキ等で反転し、十分に予乾してから行う。稲わらの水分が15%程度まではほ場乾燥できれば、そのままの貯蔵が可能である。</p> <p>乾燥が十分に行えない状態で高密度にロールベールに梱包</p>

項 目	作 業 内 容
	<p data-bbox="486 282 1390 367">すると、発熱やカビの発生等で品質が劣化するため、ラップフィルムで密封する必要がある。</p>  <p data-bbox="703 848 1171 880">写真3 ロールベアラでの稲わらの収集</p>

(作成 畜産研究センター)